

史學に於ける過去の認識

田邊 元

歴史が過去に關係し、過去の出來事に於て成立するといふことは、一見自明の眞理である。併しながら過去は過去であり過ぎされるものである以上、それは今現にあらざるところのものでなければならぬ。然るに歴史はそれを我々が現に把持して、それについて云爲するものである限り、それが今現にあるところのものであることは疑無い。如何なれば今現にあるところのものが今現にあらざるところのものに於て成立するか。斯く考へると、一見自明の眞理たる右の立言は、それにも拘らず、我々の解明を要求する問題を含むものなることが知られる。

昔聖アウグステイヌスがその懺悔録に於て、『時』の秘密を開かんと試みた際に言つた通り、過去も現在の過去であり、未來も現在の未來である、我々が過去を知るのは現在に於ける記憶に於てし、未來を知るのは現在に於ける豫期に於てするのであつて、過去も未來も現在としてのみ我々に知られるといふべきであらう。我々のもつ直接なる時の意識は右の如くに考へられる外無い。併しながら、本來の意味に於け

る歴史の關係する過去は此様な直接の意識に於ける過去ではないやうである。成程我々が自分自身の體驗を現在に有する記憶に従つて記述するとき、その内容を或意味に於て歴史であると言つて言へないことはないであらう。併しながら歴史が人類發展の各時代に於ける諸民族の閱歷といふ如き客觀的内容を有すべきものであるとするならば、右の如き主觀的の個人記錄の内容が直ちに歴史であるとはいはれない。それはたゞ歴史認識の資料の一種たるに過ぎない。直接の個人意識に於ける記憶に由つて歴史の係はるところの過去を盡すことは到底不可能である。歴史はこの種の記憶に基く資料の外に、例へば遺物の如き、全然個人の記憶と無關係なる資料を有する。而して本來或個人の記憶に基く記錄といへども、それがたゞ當該個人の意識に把持せらるゝ記憶の記述たるに止まらず、記錄として客觀的なる形に表現せられたものとなつて居る以上、單に當該個人のみならず、何人もそれに接近し得べきものであるといふ公共性を獲得し、寧ろそれが記錄として歴史の資料たるはこれに由るといはなければならぬ。歴史の客觀性と史料の公共性とは不離の關係に立つ。於此本來の意味に於ける歴史の係はるところの過去が、個人の記憶に由る直接意識の過去でなくして、それ以外のものでなければならぬことは疑無いやう

に思はれる。

それでは歴史家が史料としての記録や遺物に於て知る過去とは如何なるものであるか。それは記憶以外の如何なる意識作用に基いて知られるか。史家 Droysen が夙に哲學、自然科學、歴史學の本質を、それ〴〵認識 (Erkennen) 説明 (Erklären) 理解 (Verstehen) といふ作用に由つて特色附けた場合に意味したやうな意味に於て、理解といふ作用が右のはたらしきをなすものと今日一般に認められて居るが、その理解といふのは如何なる作用であらうか。特に歴史の認識に於ける過去の理解とは如何なるものであるか。理解といふ語はもと極めて廣い意味を有することが出来るものであらうが、今日精神科學の方法論上一定の限られた意味を有する學語として用ゐられる場合には、それは、人間體驗の表現せられた客觀的對象に、主觀が自己自身の體驗を投入して、外に現れたものの意味を内から直知することを謂ふのである。即ち理解は表現に就いて行はれるものであり、而して表現は内なる體驗の外に現れたものとしてのみ表現といふ意味を有すると同時に、理解そのものがまた體驗なのであるから、理解とは表現を媒介にして體驗が體驗と結び付き、體驗自身が自己を擴大する過程であるといふことになる。體驗と表現と理解とは斯くして内面的なる聯關をなし、以

24

て生の内容を形造るのである。我々は自分自身を知るにも、自己の行動所業を自己の内面的體驗の外に表現せられたものといふ見地から觀之を媒介にしてその表現の内にあるものを理解することに由つてなすのが常である。従つて一見記憶のみに由つて成立するか如くに見える過去の體驗記錄といへども、その中に理解を経たる内容を含蓄することが多い。而して更にこの自己の體驗記錄を通して過去の自己を知るのが殆ど全く理解の作用に基くものなることはいふまでもあるまい。

若し夫れ歴史の資料としての記錄が常に然る如く、他人の體驗記錄である場合には、それが歴史家にとつて過去を知る媒介となるのは、全くその表現としての性質により、それを通して内なるものを理解することを得しめるに因由するのである。また記錄と並んで史料として重要な位置を占める遺物にも、多かれ少かれ表現としての意味を有するものが多いことは疑はれない。従つてそれ等も亦多くの場合に理解の材料となるものであるといはなければならぬ。縱それ自身に於ては全然表現の意味を含まざる過去の自然物の遺跡といへども、それが歴史の資料たる場合には、間接に理解に由つて歴史的認識に參與する外無い。斯くて歴史家が資料に由つて過去を知るの是一般に理解に由るといふことが出来るでもあらう。歴史の内容

か内から體驗せられるべき生そのものの發展であるのは、この理解を媒介として可能となると考へられる。

斯様に歴史の認識に於て主要なる位置を占めるところの理解なるものは、それでは如何にして可能なのであるか。我々は如何にして自己の體驗を超えて他人の體驗を知ることが出来るか。我は我であり、彼は彼である限り、我は彼となる能はず、彼は我となることが出来ないのに、どうして外に現れた表現を通して内なる體驗を相會通せしめることが出来るのであらうか。これ等の間に對しては我々はたゞ黙して、『存在』のこの神秘に事實上の承認を表する外無い。已にこれ等の間を發して答を求めるといふことが、これ等の間を理解するといふ前提の下に行はれるのであつて、若し理解の可能を否定するならば、従つてこれ等の間を他に對して發すること自身が無意味に歸さなければならぬのである。理解を理解ならぬものの根據の上に基けて、その可能を論證しやうとするのは不可能の試みである。實は前に述べた如く、理解は他人の體驗を知る場合に始めて現れるのではないのであつて、單に自己を知る場合にも已に現れて居るのである。斷片的で極めて限られた我々の直接記憶の範圍を超えて、生れ落ちてから今日に至るまでの自己が同一人格にして一貫せ

る生の内容を有することを我々が知るのは、専ら理解の力に由る。これを否定するならば、嘗に他人を失ふばかりでなく、同時に自己をも失ふであらう。縦に統一ある人格の、横に協同體を形造つて歴史的存在を成立たしめて居るのは、理解作用の御蔭である。我々はこの『存在』の神秘、生の不可思議に對して、更に論證的にその根柢を求めるとは出來ない。それはたゞ直接に承認せらるべき要請としてのみ提出せられる。恰も自然の存在が法則性の確認に由つて成立するに對し、個物の裡に普遍を觀する所謂 *Ideation* の作用を、その前提として承認しなければならぬ如く、この場合にも個々の表現の内に全體の生を摺む理解作用を承認する外無い。共に有限と無限との相即、相對と絶對との融通の一面であつて、前者は外延的に廣がり、後者は内包的に深まることを異にするに過ぎない。我々が有限にして無限、相對にして絶對なることのみ、理解の形而上的基礎であるといふべきであらうか。

理解は生の表現を通して生そのものを直知する作用である。其内容は生そのものであるから、内に一貫せる統一を含み、内面的に目的論的統一に於て多様の内容が全體の聯關を成すのでなければならぬ。同一なる生の内からの發展、凡ての發展を全體として内に含む内面的統一、これが理解の内容である。歴史の理解も亦此規定

の外に立つものではない。併しながら、理解は歴史の認識にのみ特有なるものではない。例へば藝術の受用もまた明に理解に基くものである。殊に文學に至つては、常にその受用のみならず、創作そのものが多分に理解に基き、而してその表現は歴史と同じく言語に由るのであつて、歴史との親近性は何人も容易に氣付くところなればならぬ。我々は今文學の中でも主觀的な情緒の象徴的な表現を主とする叙情詩を除き、又他の文學の種別中に存する叙情詩的要素をも度外視して、専ら小説戯曲の對象的方面に着目しやう。さうすればこれ等が或人物の閱歷を通して現れるその性格と運命との聯關を、一貫せる内面的發展の統一として表現するところ、極めて歴史學の記述に近きものあることを氣付かない譯に行かない。文學に於ても歴史に於ても、體驗の内面的發展が全體の統一を成すものとして形成せられ、理解の内容が對象の個性を表現するやうに形態を賦與せられるのである。この個性的形態賦與といふ點から觀るならば、歴史が文學と著しき類似を有し、その表現に藝術的要素を含むことは、グインデルバンなども注意した通り否定し難く思はれる。

殊に政治史を中心にして歴史を記述するとき、政權の移動を中心にして人間の葛藤と盛衰興亡の運命との錯綜が劇的發展推移を形造り、戯曲の内容に類する内容を歴

史が有するやうになるのは自然のことであらう。然るに前出のドロイゼンはその史學論 *Historik* に、十八世紀末のゴエッティンゲン學派が歴史を以て専ら政治史となし、而して歴史記述の主目的を藝術的表現にありとしたのに慍らざる態を示し、更ニランケの偉大を以てしてなほ、その政治史中心の藝術的表現に、今日デイルタイの名に結び付きて漸く學界の注意を引きつゝある Graf Yorck の非難を免れなかつたのは、何の爲であるか (*Briefwechsel zw. W. Dilthey u. Graf Paul Yorck von Wartenburg. S. 60*)。史學に於ける理解の内容と文學に於けるそれとは方法論上如何なる相違を有するのであらうか。歴史の認識を特色附ける理解は如何なる特徴を有するのであらうか。

これ等の間に對して人は直ちに、歴史の係はる所は現實であり文學の關する所は假象に止まるといふ答を與へるであらう。併し我々の間は寧ろこの答そのものに關するのである。現實の理解と假象の理解とは如何に異なるか、歴史の認識に於て理解に由り過去の現實を把握再現することは、文學に於て作家が理解を媒介にして或材料から想像に由り假象を創造するのと如何に違ふかといふのが我々の問題なのである。歴史の過去が現實であるといふも、それは現在に現存する現實ではなくして、たゞ現在に現存する現實の對象(史料)を媒介にして理解により把握せられる現實

たるに止る。現在にはそれ自身として現存せざるものであるといふ意味に於ては、それは現にあることなきものである。その限りそれは文學の内容をなす假象と異なる所はない。而して假象といへども、作家の現在に於ける現實體驗材料と何等かの關係に於て結び付き、理解を媒介にして想像形成せられる限り、歴史の認識と相通する所がある。問題は、一が現實であり、他が假象であることが、如何にして理解の立場から可能であるか、兩者に於て理解が如何に異なるかといふことに存するのである。我々はこの問題を如何に解したらばよいであらうか。

曩に私は理解そのものがまた我々の體驗に屬するのであつて、體驗は表現に自己を現し、而して表現の理解に於て體驗は體驗と結び付きて、生の發展を成すといふことを述べた。従つて如何なる理解も具體的には生の内容に屬するのであつて、遊離したものではないのである。然るに理解の内容に現實と假象との區別がある以上、生の内容そのものに現實と假象との區別がある譯である。抑も斯かる現實と假象との區別は何に由來するのであらうか。我々は先づこの一層根本的な問題から先に考へて見なければならぬ。生の體驗は、それが生の體驗である以上、一方に於て自己の欲すると欲せざるとに拘らず、自己の自由を脱するものとして自己に對し必

然的に課せられ負はされたる内容を記憶に於てもち、他方に於て、この内容との交渉の裡から自己が自己の意志に由つて自由に自ら化し行くところの自己の可能態に對する態度を含まなければならぬ。これが生の基本形式である。生は記憶の必然態を負ひて可能態を豫料する自己の態度の現在に成立するといふことも出来るであらう。過去現在未來の我々の『時』の體驗もこの生の樣態に成立する。過去とは自己に對立し、自己の意志を以つて自由に左右する能はざる、自己に課せられ負はされたる記憶に基く内容の必然態を謂ひ、未來とは斯かる内容との交渉の裡から、自己に屬する可能なる内容に對する豫料の樣態を謂ふのであつて、現在はこの兩樣態の聯關するところ、必然の自由に轉じ、負課の可能に移る點に外ならない。而もこの全體を通じて『時』の體驗を可能にし、その樣態の差別をなす根柢となるのは、自己の自由によつて可能を現實にする意志に外ならないから、意志が『時』の體驗の根源であり、またその點から未來が『時』の基本樣態であるとも考へられるのである。未來なしには過去も現在も『時』の樣態たる意味を有することが出来ない。我々が過去の表現を理解するといふのも、その過去が有るものでなく成るものとしての生の過去である限り、この未來に對する體驗の樣態をそれに投射することに外ならぬ。而して

この未來をして未來たらしめる意志の自由に對し、これを制限し束縛する自由の障礙、乃至障礙の障礙としての促進者として、體驗せられるものを、總じて現實といふのである。その直接に障礙として體驗せられるものは即ち今述べたところの、必然として我々に負はされ課せられた内容に外ならない。これは現在に於てはたらくところの過去の内容である。現實の本意はこゝに存する。現實の現實たる所以はそれの歴史性に存するのであつて、歴史の理解は記憶をその基底として豫想する所にその特色がある。然らば現實に對する假象とは何か。假象とは今述べた『時』の様態に於て發展する體驗の流から或點に於て切離されたものの謂である。勿論假象といへども全體的なる生の部分内容として現れるのであつて、假象を形造る想像作用はもとより體驗に屬する。全然體驗から切離され、生に何等の聯關をも有せざるものは無であつて、假象といふことさへ出來ない。たゞその形成作用でなく、形成せられた内容が生の直接なる聯關から切離され、體驗の本流から外に抽離せられたものが假象である。これは生の本質を成すところの、内容相互の或は促進し或は妨碍する直接作用的聯關の圏外に存し、生の現實なる内容に參與する力を缺如する。如何にして斯かる生の作用的聯關からの部分的遊離が可能であるかは、生そのもの

32

の可能と同じく他から演繹することが出来るものでない。我々はたゞそれを生そのものの本質に屬する可能性として承認する外ない。生は前に述べた如く、その負はされ課せられたる内容の制約の下に、常に自己の可能態に對する豫料と態度決定とをその缺くべからざる契機として含むものであるが、この現實的なる生の聯關に屬する可能態がその聯關から離脱せしめられ、記憶の制約を脱して、感情の發揚に導かれて自由に變改せられ、それを基底として、その上に創造の自由なる形態が築かれるならば、こゝに現實の區別せられた假象の世界が現出するであらう。我々はこの假象的形態創造のはたらきを想像作用と呼ぶのである。想像作用に由つて生そのものの内容の中に現實と區別せられた假象的内容が生ずる。而して斯かる假象的内容もその自らの表現に於て自己を客觀化し、その表現の理解を通して自らを富まし、深さと廣さに於て自己を發展せしめて、統一的なる全體の表現にまで自己を形成することが出来る。これが特に想像作用表現作用形成作用に卓越せる天賦を有する詩人の創作する文學的作品に外ならない。作品の内容はその制作の出發點に於て生の現實的内容に對する直接聯關から切離され、生の根本様態としての現實的時間の外に置かれたものである。従つてそれは生の基礎的契機としての關心の外に

立つものである。藝術の受用が無關心を特徴とすることは廣く承認せられて居ることであるが、これは初めからそれが生の現實なる關心の外に立つものとして制作せられることに因るのであらう。

右の如く無關心の立場に於て生の現實的作用聯關から離れ存するものとして形成せられるところの文學的作品に於ては、その理解は現實なる生の促進或は障礙的作用的聯關の外に立つものに關はるが故に、自ら靜觀的である。自己の意志的關心に對し積極的にも消極的にも關係なき無記無差別なるものとして現るゝ假象の世界に對しては、我々はそれをたいあるがまゝに理解し統一するのが自然である。

然るにどこまでも現實の過去を理解する歴史の認識に於ては、それと趣を異にする。此場合に於ては理解の對象たるものは、たい我々の關心に無關係にあるところのものではなくして、この現に我々が生くる生そのものに對し促進乃至障礙的作用的聯關に立ち、記憶を通し過去の現實として直ちに我々の意志に交渉をもつところの關心の對象である。即ちそれは現實なる生そのものに屬し、現在を通して間接に我々が現に生きるところのものなのである。こゝに無關心なる藝術の理解と全く正反對なる歴史の理解の特色がある。若し歴史の認識が文藝の創作に於ける如く、過去

の事實を理解に由つてたゞあるがまゝのものとして形態化し、それを眼前に見る如くに表現することに盡きるならば、物語風の叙述(Erzählende Darstellung)が歴史の唯一最高の形式となるであらう。然るにドロイゼンも此種の叙述の標準たる所謂客観性が歴史家の最上の名譽ではないといひ、而して客観性を重んじたランケがヨルクに由つて藝術家 Aesthetiker と呼ばれ、(デイルタイもランケを ein grosser Künstler と謂つて居る)彼には歴史が見られるもので生きられるものではなかつたと云つて非難せられて居るのは、右の如き歴史の理解の特色が逸せられて居る爲でもあらう。(ランケに對するデイルタイの批評もまた大體右の立場から解せられやう。 Dilthey, Schriften VIII, S. 101—103 参照)。歴史の理解は現實の生そのものに聯關的に所屬する過去の理解でなければならぬ。我々の前にあるものとして見られるのでなく、我々の内にはたらくものとして體驗せられるものこそ歴史である。それは生の聯關から切離された舞臺面の出來事ではなくして、生そのものの内面的實質でなければならぬ。過去の理解は即ち現在の生内容である。現在はずつ過去の理解を通してのみ現在を自覺することが出来る。歴史は現在の生が自己を寫し見る鏡の如きものである。現在の生に於て生きる内面的契機として過去を理解するのでなければ歴史は成立

しない。こゝに、その歴史認識の能力としては不足なることが前に指摘せられたところの記憶が、それにも拘らず、歴史に對して基底の意味を有する所以を認めなければならぬ。而も曩に述べた如く現在に過去の未來に轉じ、必然的負課の可能的自由に移る限界點たるに止まり、生の基本契機としては、過去の負課的内容に對する交渉の裡から、自己の自由に由つて自ら化し行く自己の可能態に對して執る態度に成立するところの未來こそ、最も重要な時の様態であるとするならば、歴史は單に過去に於て成立するのではなく現在に於て、否一層具體的には未來に於て成立するのであるといふべきでもあらう。歴史に於ける過去の理解は未來との聯關に於て、未來の様態を過去に投入する現在のはたらきである。

此事は歴史の認識に重要な特色を賦與する。既述の如く、歴史の認識に於て、現實の生から切離し、後者と無關係なる別の世界として過去をそのあるがまゝに理解し、それを眼に見る如く表現するといふだけでは、却て歴史の歴史たる本質は失はれるのであつて、歴史認識の特色は現實の生との作用的聯關に於て過去を現在に生きるものとして理解するにあるとするならば、その認識の内には常に現實の生がその契機として存するのであつて、所謂客觀性とか公平性 Unparteilichkeit とかいふ形でラ

ンケが要求したやうに、生の主體としての主觀が全然對象の背後に隠され盡すといふことは、到底出來ることでない。寧ろ歴史認識の全體を通じて主觀の世界觀、人生觀わけても歴史觀といふ如きものが、現在の生内容として歴史の理解を規定するのが必然の約束である。此様な現實の生内容或はその屬する主觀が歴史の認識を制約することは、常に史料の理解乃至解釋に於て現れるのみではない。史料そのものの選擇搜索にも現れるであらう。而してこれは避け得べき制約ではなくして、寧ろ歴史そのものに必然なる制約である。ランケが客觀主義の立場から政治史を歴史の中心としたのも、それ自身この主觀的制約たることを免れないであらう。歴史認識の客觀性は所謂客觀主義の立場から主觀性を排除することではなくして寧ろ主觀性を充分に認めた上で、その一面的抽象的なることを防ぎ斥けることに成立する外あるまい。即ち客觀性は普遍的な主觀性を意味する外ないであらう。歴史家は所謂歴史的社會的現實として自己を顯現するところの生の動的進展を自らの内に體驗し、その力の顯現する諸層の間に基底的なるものと表層的なるものとを區別して、その相互間の制約被制約の關係を正しく把握することにより、過去の史實を現在の生の體驗に對する聯關に於て理解し組織するのである。其際自己の特殊なる

閱歴と關心との爲めに制約せられる結果、或層にのみ着目して他の層を無視し、或は
 基底のならざるものを誤つて基底的と看做し、その爲めに眞に基底なるものゝ本
 源性を逸する如きことなく、それ等を周匝に考慮してその相互關係を正しく把握す
 るならば、それによつて歴史の客觀性が獲得せられる。この外延上周匝にして内包
 上秩序的綜合的なる具體的普遍性が即ち所謂客觀性の本義に外ならない。歴史家
 が博大なる同情と深刻なる理解とをその重要な資格とするのは正にこれに由る
 のである。

併しながら翻つて考へると、歴史的認識の客觀性の豫想としての歴史家の普遍的
 主觀性は、形式上終局的理想として掲げらるゝと同時に、内容上はたゞ無限の差等に
 於て實現せられるところの近似性に止まらざるを得ない。假に歴史家の個性に由
 來する制約を、凡ての精神生活の所産に共通にして歴史の認識に特有ならざる制約
 として問題の外に置くとしても、歴史家の現在に於ける體驗が過去の理解を制約す
 ることは必然の約束としてその普遍性に對する制限たることを免れないであらう。
 生の聯關に於て、現在に生きるどころの過去の意味なるものは、現在の生内容の如何
 に従つて相違するのが必然であつて、所謂歴史的效力 *historische Wirkbarkeit* なるものは、

現在に相對的にのみ語られ得るものでなければならぬ。如何に博大の同情と深刻の理解とを有する歴史家があつても、その立つ所の現在を全然脱却して過去の歴史を認識することは出来ない。曩に述べた如く歴史は單に過去に成立するのでなく、現在に於て、一層精しくいへば未來との聯關に於ける現在に於て成立するものであるとするならば、歴史の認識が現在と離れて成立し得ないことは當然といはなければならぬ。こゝに歴史的認識の歴史性といふべきものがある。『歴史家も時代の子である』といふ立言は、單に事實としての制約を意味するよりも以上に、本質としての必然的制約を意味するものとして妥當する。特に歴史の理解を指導すべき原理が所謂歴史觀として掲げ出さるゝ如き場合に於ては、その歴史觀そのものの歴史性は最も重要な制約とならなければならぬ。經濟的生産組織の社會に於ける基底の意味を高調し、他の文化諸領域を凡てこれに制約せられる上表建築として理解せんとする所謂唯物史觀の如きものも、またこの立場からしてその歴史的被制約性を自覺承認しなければならぬのではあるまいか。この史觀が少くとも或民族の或時代に於ける歴史を理解するに對して指導的意味を有することは恐らく否定し得ないであらう。併しそれが超民族的に超時代的に、一切歴史的認識の指導原理で

あると主張せられるならば、その主張は全く歴史的認識の前述の本質を無視した抽象論であることを免れないであらう。この史観は所謂資本主義末期に立つ西歐民族の史観として妥當するとしても、それがその發生した歴史的位位置を超えて絶對普遍的妥當性を要求することは正當ではあるまい。この史観そのものに従つて考へても、已にこの史観は疑もなく一の觀念形態なのであるから、それ自身その發生せる社會の基礎條件たる經濟的生産組織に制約せられて居る筈であつて、斯かる歴史的制約の下に立せられた原理を超歴史的に妥當すると主張することは一の明白なる自家撞着でなければならぬ。たゞこの史観が發生した歴史的事情と共通なる事情の存在する場合に於てのみ、その共通の程度に比例してその妥當性が成立するのみに止まるであらう。民族と時代とを異にする歴史家が、斯かる事情の顧慮なしに直ちにこの史観を如何なる歴史にも當嵌めやうとするならば、それは到底一面的抽象的となることを免れないであらう。歴史家は夫々自己の生きる現在の生内容を以て、それとの作用聯關に於て過去を内から理得しなければならぬ。一般に超歴史的なる公式を以て歴史を構成することは眞正なる歴史の認識を廢棄することに外ならないと思はれる。

このやうな歴史的認識の歴史性といふことから必然に、史學の認識に特有の相對性が導かれる。一見すると、歴史は過去に存するものであつて、過去は不變不動なるものであるから、若し過去の史料が完全に與へられ、これを解釋する歴史家の能力にして完全であるならば、斯かる過去の歴史に對する認識は絕對的にして何等相對性に入るべき餘地は無いやうに思はれる。自然科學に於てはその立する所の法則理論は時と處とを超えて如何なる經驗事實にも妥當することを標榜するものであるから、若し將來に於て當該理論に由つて説明し得ざる事實が經驗せられるならば、それを説明し得るやうに理論を改廢しなければならぬのであつて、その意味に於て自然科學の認識は常に暫定的であり、現在の經驗に對して相對的たることを免れないのであるが、歴史は不變なる過去に關するからその認識は本質上絕對的であるかの如くに見えるであらう。併しこのやうな考は、過去といふものを主觀の理解と全く無關係に存立して、理解はこれをたゞ模寫するに止まるかの如くに思ふ獨斷論の結果に外ならない。過去の理解が前述の如く現在の體驗内容を媒介にして内面的意味を生産することに由り行はれるのであるとすれば、過去は常に現在と共に意味を變ずるのであつて、理解は模寫でなく生産でなければならぬ。過去は體驗の

進行と共に常に外延上その範圍を擴大するのみならず、新なる生内容の現在として發展するに伴ひ、内包上新なる意味を加へてその内容を豊富にするのである。外延の擴張は同時に内包の深化を伴ふものとして、過去は決して固定せられたものでなく常に發展するものでなければならぬ。従つてその認識は常に現在に相對的のみ妥當するのであつて、超歴史的に絕對的妥當性を要求することは本質上出來るものでない。その意味に於て歴史の認識は史料の完備、歴史家の能力の完全といふ假定の下に於ても、猶その本質上現在に相對的なる妥當性以上に出ることは出來ないのであつて、常に未來に於ける變化を豫想しなければならぬ。前に過去の特色として述べた負課的必然性といふことは、たゞこの制限の範圍内に於てのみ成立するのである。併しこれは自然科學の理論が未來に於ける檢證と補正とを豫想する意味に於て暫定的といはれるのと異り、現在に相對的には一定の眞理性を本質上確保し得べきものなのであるから、それは暫定的と呼ばれるべきでなくして正に歴史的と呼ばれるべきものである。もと超時間的普遍的理論をその認識目的とする自然科學に於ては、その認識の對象に關して歴史的相對性といふことが語られるべき餘地はない。従つて超時間的普遍的理論といふ要求に對して暫定的の満足を現實の認

42
識は與へるに止まる外無いのである。併しながら自然科学もその對象の側からでなく主觀の側から文化の産物として、歴史的に發展する精神の所産といふ立場に於て觀られる場合には、常に暫定的にして不斷の變改を受ける理論がたゞ無秩序に新陳相交代するのではなく、一貫の生命の古きを内に止揚して新しきものに進むといふ意味を具へるものとして現れる。所謂自然科学史はこの發展の跡を示すものである。而してこの科學史の立場から過去の理論を觀るとき、その理論の有する意味は現在に於ける科學の進歩に従つて種々に變化するのであつて、現在の進歩に由り過去の理論が新なる意味を獲得することは常に見られることである。この歴史的認識の現在に對する相對性即ち歴史性こそ、即ち一般に史學の認識性質の特色をなすものなのである。歴史の認識は歴史的といふ意味に於ける相對性を脱することが出来ない。併しこの相對性は歴史的といふことの本質上、内面的なる意味聯關に於て發展する統一を成すのであつて、決して無秩序を意味するものではない。而してまたこの相對性に關聯して史的認識の循環性ともいふべきものが現れる。いふまでもなく我々の現在は常に過去に依存するものであるが、併し同時に過去もまた現在に依存すること右の如くであるとするならば、過去と現在とは互に相依り相俟つ

てその循環の内に生の發展を遂げしめるといふべきであらう。現在の體驗は過去の表現を理解することに由つてその内容を富ますと同時に、過去の表現の理解は現在の體驗を媒介として行はれるのであるが、併しこれを逆にいへば、過去の理解が現在の體驗を媒介にして行はれると同時に、現在の體驗は過去の理解に由つて發展するのであるといはれる。こゝに我々は歴史と現實の生とが全く相即融通することを見るのである。

以上を要約すると、史學に於ける過去の認識は、未來に對する態度を含むところの現在の體驗を媒介とし、それとの作用聯關に於て、記憶に結びつく過去の表現に對し對未來の生の様態を投射する理解の作用に由つて行はれるのであつて、その理解が、理解自身をも含んで發展する現在の體驗に依存することにより、循環的に現在と雙關々係を持ち、その意味に於て過去の認識は無限の層に於て現在に依存し、従つて未來に制約せられるといふことが出来るであらう。この最も具體的なる意味に於て、歴史は單に過去に成立するといふよりも、寧ろ過去を含む現在、否現在を媒介として過去を擔ふ未來に於て成立するともいふべきではあるまいか。(二十二二十七)